



平成十七年六月二十日
〒九三二〇八〇
高岡市閭屋町四十
有限会社 沖商店発
2015.6.20

いつもお世話になりありがとうございます。
『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょう。』そんなことを皆様と一緒に考えたい。そして皆様の意見を頂きたい。そんな思いで本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚の無いご意見をお寄せくださいます様お願い申し上げます。

一 次女の結婚式と英仏旅行

五月二十九日、次女「奈美子」が結婚式を挙げました。相手はイギリス人で、いろんな手続きの関係で籍を入れたのはもう少し前でしたが。

それで二十七日、日本を発ちイギリス四泊・フランス四泊の旅をして来ました。

二十七日朝、五時七分、高岡駅発サンダーバード二号で新大阪駅へ、はるか十一号に乗り換え関西空港へ着いたのは九時四十分。十一時五十分、JAL124にて関西空港発、十二時間の飛行後、イギリスのヒースロ空港へは十六時十五分（日本時間二十八日午前〇時十五分）に到着しました。

奈美子夫婦の迎えの車で SWINDON（スウィンドン）のホテルに着いたのは十七時半、家を出てからホテルまで、実に二十時間の長旅でした。

奈美子の夫は Andrew Bergbaum（アンドウリュウ・バーグバウム）といます。イギリス・ホンダの社員で、彼との「馴れ初め」その後の「つきあい」などについては詳しく聞いていませんが、結婚するに至りました。奈美子は Namiko Bergbaum という名前になりました。

結婚式は、式後の祝宴をアンドウリュウの妹夫婦が経営しているレストランですということ、教会ではありませんでしたが、その近くの然るべき設備の整った施設で行われました。

ホテルも二十八日 SOMERSET（ソマーセット）と

いう所に移動し、そこでバーグバウム家の人たちと紹介を兼ねて昼食を共にしました。

勿論、初対面でしたが皆さん緊張したところもなく、和やかな雰囲気の中で食事をしました。

アンドウリュウの父親は五十六歳、明るく愉快な人でよくジョークを言うし、上手いそうです。母親も明るく若い娘のような立振舞いで、ちなみに髪の毛は真赤に染めていました。父親の両親も健在で、こちらはいかにもイギリス人という感じの、温和で品の良い人たちでした。あと、アンドウリュウの兄弟、父親の兄弟、母親の母親・兄弟をはじめ一族の紹介を受けましたが、皆さん、明るく楽しい方々ばかりだとお見受けしてまいりました。

後で聞きましたが、相手さんもこちらのことを、形式張った気難しい者ではないかと心配していたらしく「明るく楽しい一家でよかった」と言っていたということでした。

二十九日午後三時半、ウェディングドレスに身を一つんだ奈美子と私達夫婦は、百年は経つだろうと思われるロールスロイスのクラシックカーでホテルを出発、イギリスの昔ながらの小さな村をふたつみつ通り過ぎて、細い田舎道を三十分かけて四時に会場に着きました。娘を嫁ぎ先へ届ける親の気持ちを味わわせるに充分な演出だったと思います。

結婚式会場はキリスト教の教会かと思いきや、普通のレンガ造りの建物で、それは質素で趣があり、式の間行われた部屋も、正面全面に歴史の感じられるどっしりとした絵の織物が掛けられているだけの落ち着いた部屋でした。（仏壇と神棚を拜んでいる私のことを慮っての心配りだったのだと思います）

三十分ほどの儀式の後、外へ出ました。広い芝生の庭、その向こうは牧場、小川に見立てた溝に架けられた橋、サイドには手入れの行き届いた花園と、なかなかムードのある演出がなされていました。そこで二時間ほどシャンパンを飲みながら話をしたり、写真を撮ったり、私にはちよつと長く感じられるほどでした。

七時ごろに切上げ、アンドウリュウの妹夫婦が経営しているレストランへ向かいました。そこへは、アンドウリュウの友人、奈美子の友人、イギリス・ホンダの上司などの皆さんが加わり、総勢二十人余りのパーティーとなりました。

ここでも基本は立食パーティーで、立って飲みながら話している所へ、厨房からお盆の上に料理を

載せて持つて来て勧めるのを、好きなものだけを揃んで食べる、というスタイルです。

それでは、それに慣れていない日本人の私には、さぞかし辛かろうと、奈美子が気を利かせて、いつもより椅子を多く用意し、出窓などにも座布団を置いて、座る場所を多くしておいてくれたので、英語の話せない私は、ほとんど座って飲んでいることができました。

そんな私でしたが、私には手放して呑んでいる訳にはいかない事情がありました。それは「パーティーの席上で父親としてのスピーチをして欲しい。それも英語で」というものです。

それで私は日本語で作った文章を奈美子に送り、それを英文に翻訳し、その英文にふりかなを付け、さらにそのふりかなにアクセントを打って送り返して貰いました。届いた英文はあまりに長すぎて、私の下手な『ジャパニーズ・イングリッシュ』では、パーティーの雰囲気壊す恐れがありましたので、半分ほどに要約して再度送って貰いました。

これらの仕事は、アンドウリュウの協力なくしては、できなかったと思います。すなわち、これが面人共同作業の第一号ではなかったかと思っております。それからは暇を見つけては練習しました。なにしろ、高岡から二週間と続けて離れたことのない私は、日本語の標準語さえ上手く話せないのです。高岡弁を丸出して話しますが、私の高岡弁を理解できる人は、日本人の中でも多くはおられません。練習初めころは自分でも「これは、ドイツ語か韓国語のイントネーションだな」と思いました。そんな状態でのパーティーですから心穏やかではありません。

でも、いまさらどうにもなりません。

私は、自分でも楽天的だと思つていますが、酒も大好きですので、緊張をほぐす意味でも、ワインやブランドイーやらジャンジャン呑みました。やがてとうとう私のスピーチの時が来ました。私は「ハロー。レディース、アンド、ゼントルマン」と始めました。酒をたくさん呑んだおかげかアクセントに力が入り過ぎずに、割とスムーズに読めました。スピーチが終わる最後の言葉「サンキュー、サンキュー・ヴェリマツチ」と言った途端、万来の拍手と歓声が上がりました。アンドウリュウの両親をはじめ祖父、叔父、叔母、会場の皆さんが握手を求めて来て、「ヴェリ・グッド」「ナイス・スピーチ」など「よくやった」ということを、言葉でもさること

ながら、目や態度にまで頭わして伝えたがっているのがよくわかりました。そこには、賛嘆のみならず尊敬の念まで感じられました。奈美子も私の子供たちも、口々に「お父さん、よかったよ」と言いました。私は、酔払っていつつかりわかりませんでした。この度はよっぽど上手くやったのかなと思いましたが、（私は、平素褒められると「他の人はいざ知らず、わしほどの者には、これしきは当たり前だよ」と憎まれ口を叩くので、私の子供たちはめったに私を褒めませんでした）

後日、奈美子からメールで「結婚式では色々ありがとうございました。ありがとうございました。何よりも、お父さんのスピーチが現地の人からかなりの好評で『英語はもちろん、内容に感動した』という感想を皆から言われました。お父さん始め、その他の沖ファミリーみんなが、とても親しみやすく、堅苦しい日本人のイメージを一変させたみたいですよ！」とありました。折角ですのでここで皆様に、日本語の原文を紹介いたします。

『赤の太字はジョーク』あちらの人達はジョークが好きで、特にスピーチには不可欠との事です。それです。折角が、私の日本語原文に、適当に加えてくれました。

こんにちは皆さん。私は奈美子の父親です。下手な日本語の英語でスピーチするのをお許しください。親愛なるバーグバウム家の家族の方々、

ならばにこの結婚式にご参集の方々へ、この度、縁ありましてアンドウリュウ君と奈美子が夫婦の契り結びました。皆様方にはお忙しい中、ふたりの結婚式にご参集賜りまして心よりお礼申し上げます。

この結婚式に際して、私は先ずもって、ここまでに至らしめてくれた目に見えない力（私どもではこれを神とも仏とも天ともよびます）に、感謝の念を捧げます。

私は（多くの日本人と異なり）、自分の子供は自分のものではないと思つていません。彼らは、自然からの預かりものであり、彼らには彼らの人生があり、彼ら各々の考え方・生き方・使命があるのだと思つています。ですから、伴侶選びにしても、相手が誰であろうと自分の好きなように決めなさい、と言つてまいりました。勿論、父親として、と言うより人生の中で

の最も身近な先輩としての意見は言いますが、最終的には本人が決めるべきだと思っています。

それはなぜなら彼らには自己責任を持って、人生を亘って行って欲しいからです。

そんな中、一年間のイギリス研修を終え日本へ帰国して間もないころ、奈美子から「仕事を取るか結婚を取るか」と言うことについて相談を受けました。

私は折角ここまで来たキャリアアウーマンとしての立場を擲つのは勿体無いと思いましたが、それより何より彼女が結婚生活を営んで行く上で、後悔するような心残りを持つていてはいけないと思い、今の会社の仕事を続けることを勧めました。

彼女は悩みに悩んだと思います。その結果、アンドウリュウ君との結婚を選びました。

すなわち、アンドリュウはホンダに勝ったという事です、おめでどう！

私は、常々「人生においては、何が良いか悪いかわからない。だから迷うような難しい事柄に出会った時は、考えに考え、悩みに悩んで『自分にはもうこれ以上の判断能力がない。だから将来どうなるかと絶対後悔しない』という思い・心境になるまで考えた上で、行く道を選びなさい」と言ってきました。

だから、今の彼女にはアンドウリュウ君との結婚に対しては一点の曇りもないと思います。

また、将来どんなことがあるかと、後悔だけは絶対にしたくないと思います。**(いや、そう願いたい・・・)**

奈美子から初めて「好きなイギリス人がいる」と聞いた時、私の頭には、青い目・高い鼻・高い身丈の人物で、いつもスーツに身をかため、貴公子然と気取った振る舞いのイギリス人が思い描かれました。

でも、もうお分かりだと思えますが違っていました。会って見ると鼻は確かに高いが目はブロンド、**身長も全然高くない！**立ち振る舞いも気取った処はなく、気さくで親しみやすいのでほっとしました。

アンドウリュウ君は私の自宅へも来ました。その時彼は、**私たちが用意した料理を全て食べていました(もしかすると本当に日本人では？と思つたものです)**

奈美子に「どこが一番気に入ったのだ」と聞いたことがあります。そしたら彼女は即座に「すごく優しい」と答えました。アンドウリュウ君には、いつまでも奈美子を愛し優しくしてやって頂きたいとお願ひします。

(がんばれよ！)
終りにあたり、こんにちまでアンドウリュウ君を慈

しみ育てて頂いたご両親に感謝し、今後ともふたりの行末が安穏でありますように、そして今ここに「参集の皆様方が、今後益々ご健勝で活躍されますこと」を、「祈念申し上げ私のスピーチとさせていただきます。」
2005.5.29
沖昌弘

無事、結婚式をすませ三十日朝、奈美子を含めたバークバウム家の家族と別れを告げ、SOMERSETのホテルを立ち、タクシーでロンドンへ向いました。

一時間あまりで着くはずのホテルまで、ラッシュにも会いでしたが、市内へ入ってからも同じところを右往左往し二時間かかりました。後でわかったことですが、ホテルはロンドンの市内の中でも、来た方角からは一番近い所にあつたのに、遠回りして市内へ入り、ラッシュに会い、迷つたのでした。にもかかわらず料金はかかっただけの二百ポンド(約四万円)払われました。悪いタクシーはどこにでもいるものです。

ロンドン市内観光の後、四時ごろに長女と三女は日本へ帰るためヒースロ空港へ発ちました。

私たち夫婦と長男夫婦はホテルで一泊、翌三十一日は、十一時に行われたバックingham宮殿の衛兵交代の様子をはじめロンドン市内観光の後、十五時十分 WOTERLOO 駅発の特急電車「ユーロスター」でパリへ、パリ NODE 駅へは十八時五十三分に着きました。

NODE 駅に着いて荷物置き場の荷物を見ると、一番小さいケースがなくなつてはありませんが「しまった」と思つて出口へ走つて行って監視しながら捜しましたが時すでに遅し、見つかりません。警備員に言つても首を横に振るだけ、駅の警察官派出所へ届け出しましたが取合つてくれません。海外旅行保険を掛けていたので、次難・紛失届けだけでもと思いましたが、受付けません。「取られるあなたが悪い」とばかり、顔には笑みさえ浮かべて「パスポートとかクレジットカードなど重要なものでない限り受け付けない」とのこと、お困柄とはいへ腹が立ちました。仕方がありません。最近日本も外国人のせいか物騒になりましたが、本場の泥棒の味を知らされ大変勉強になりました。

パリは凱旋門のすぐそばのホテルで四泊しました。凱旋門・シャンゼリゼ通り・モンテニユー通り・フランソワ・ブルミエ通り・ジョルジュ・サンク通

り・アルマ広場・シャイヨ宮・エッフェル塔・ノートルダム寺院・ルーブル美術館・オルセー美術館・オペラ座・マドレーヌ寺院・コンコルド広場・モンマルトルはサクレ・クール寺院・モンマルトル墓地など、観光地図に太字で書いてある見所を限なく、仕事をこなすように廻つて来ました。オプシオンとして、ベルサイユ宮殿観光ツアー、セーヌ川ディナークルーツアーも楽しんで来ました。

六月四日、パリ市内観光を満喫してよいよ帰国です。しかし、三女の真理子が言った通り「パリは一週間居ても見足りない」と思いました。未練たっぷりに十三時四分発のロンドン発 WOTERLOO 駅行の「ユーロスター」に乗るべく、十二時半に NODE 駅に行きました。今度は盗まれないように荷物を厳重に繋いでおきました。帰路は気を張つていましたので道中はすべて覚えていきます。ドーバー海峡を渡るトンネルの所要時間は約二十分です。十四時五十分 WOTERLOO 駅に到着。そこからタクシーでヒースロ空港へ行く予定でしたが、タクシーの態度の悪さを考え地下鉄にしました。十八時五十分、ヒースロ空港を飛立ち、時差八時間を加えて関西空港へは六月五日の十四時五十分に着きました。関西空港から新大阪駅を経て高岡駅へ着いたのは予定より一時間前の十九時四十分でした。

私は高岡駅に着いてほっとしました。地球上の極東にある日本、日本の中の富山県、富山県は高岡市、高岡市から離れたことのない私には、ここが一番住み易いと思います。はるかイギリスの地で奈美子はしあわせに暮らせるだろうか、心配でなりません。ところで、この度の旅行で感じたことを以下に記します。

その一、日が長い。緯度の関係か、朝は早く四時ごろ明け、夜は日が暮れるのが遅く九時〜十時まで明るい。反対に冬は昼が短く夜が長いらしい。

その二、イギリスもフランスも平地が多い。一昨午奈美子がイギリスに研修にいた時、ロンドン近郊を見る機会がありまして、その時見た限りでは、イギリスには日本のような高い山はありません。日本では、景色の向うには必ず山がありますが、どこまでもなだらかな草原が広がつていて所々に森があるという風景です。北のスコットランド地方は知りませんが二百メートル以上の丘はないそうです。パリの NODE 駅からドーバー海峡トンネルの入り口まで「ユーロスター」の車窓からの風景も同様でした。

その三、パリ市内の地下鉄は判り易い。地下鉄は道の通りに走つていて、何処で乗降しても迷いません。地図の通りで東京の地下鉄とは全然違います。

その四、エッフェル塔と東京タワー。セーヌ川に架けられた橋を渡るとエッフェル塔の真下で、そこは公園広場になっていて、さらにその向うは芝を植えた公園が続いていました。賑わいの中にも趣があり、これを真似て造つた東京タワーも何故ここまで真似なかつたのか、フランスと日本の心の余裕の違いが感じられました(土地の広さの違い)。

その五、西欧諸国の横暴。ルーブル美術館は四時間ぐらい見学しましたが、それでもパンフレットや本を紹介してある有名なものだけを目当てに、他は首を左右に振つて素通りするだけでした。それほど多くの美術品ですが、他国から取つてきた物も多く、武力で盗み・強奪して、世界中から集めてきたものでしょう。これらの夥しい世界の美術・芸術品を見ると、嘗てのイギリスやスペインなど西欧諸国の植民地化競争が想像され腹が立つてきました。

その六、フランスではワインが安くビールが高い。シャンゼリゼ通りの歩道の露天席で、行き交う人々を見ながらビールを飲む。一度はしてみたいと思つていたので早速出かけました。ある店で大ビール(一ℓ)「エンビエン(いんべん)」と訊くと十一ユーロ(千五百円)でした。あまり高いので止めてきました。それでホテルから少し路地へ入った店で、ここなら安いだろうと代金を確かめずに大ビール(一ℓ)飲んで清算すると十六ユーロ(二千円)でした。その後は当然、シャンゼリゼ通りの歩道の露天席に決めましたが、それに比べワインは旨くて安いと思ひました。セーヌ川ディナークルーツアーでも、ワインはサービス、ビールは別料金でした。

その七、フランスパンは旨い。私は酒飲みで、甘い物、腹の膨れる物が嫌いです。パンもお菓子の様で食べません。ところがフランスパンはしこしこ歯応えがあり、砂糖の甘さもなく、酒のつまみにしても好いことを初めて知りました。

その八、楊枝がない。イギリスにもフランスにも楊枝らしきものはありません。どうして歯に挟まったものを取つているか訊きましたが、首を傾げるだけでした。

有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘
個人メール Email 03252525@nifty.com

(この欄への意見は個人宛の連絡先へ送る)